

ハイスぺ副社長になった初恋相手と再会したら、
一途な愛を心と身体に刻み込まれました

プロローグ

高級ホテルの最上階のスイートルーム。そこにある豪華なベッドの上で、十年間思い続けてきた初恋の相手が私に跨っていた。見下ろす瞳には確かな熱を宿している。

彼は高価そうな腕時計を外し、ベッド横に備え付けられた寝台に置くと、部屋の電気を消す。途端、月明かりがロマンチックに私たちを優しく照らしだした。

「好きだよ、結^{ゆい}乃^の」

初めて名前を呼ばれた瞬間、ようやく彼の特別になれるのだと実感して、喜びに胸が打ち震えた。彼はベッドに放り出されていた私の右手に自分の左手の指を絡ませて、ギュッと優しく握った。視線が熱く絡み合ったのを合図に、彼は私にキスを落とす。

はじめは唇が触れるだけの軽い口づけだったものの、徐々に激しく官能的になる。

「んっ……」

息継ぎの合間にわずかに開けた唇の隙間から、彼の舌が素早く入り込んでくる。味わうように舌を吸われて舐め転がされて脳が痺れ、身体の芯が震えてつい甘えたような恥ずかしい声を漏らしそうになった。

「ふっ……んんっ……」

彼は昂^{たか}りを抑えることなく、熱い呼吸を繰り返しながら私を求めるようにさらに深く舌を差し込んだ。舌を捌^はめ捕^{とら}えられると、愛する人に強く求められている多幸感で胸がいっぱいになる。長く心地のよいキスのあとに唇が離れた。荒く熱い息を吐く互いの唇の間に、ツーツといやらしい銀糸が伝う。

私は甘いキスの余韻に浸ったまま、とろんとした表情で彼を見上げた。

「……はあ……結乃、可愛い」

徐々に服を脱がされて下着姿になった私を、彼は滾^{たぎ}った瞳で見下ろした。まるで彼の視線に犯されているみたいなの錯覚^{おちい}に陥^{おちい}る。欲情しているのか、先程よりもずっと呼吸が荒い。

「結乃は着痩せするタイプだね」

「やつ、見ないで……」

指摘された途端、恥ずかしさが込み上げてきて、いやいやと首を振る。

「それは無理だつて。十年間、ずっとこの日を夢見てきたんだから。見るし、触るし、舐めるよ。」その言葉と同時に、彼の手がブラジャーの上から膨らみに触れた。

「結乃の胸、片手じゃ収まらないんだけど」

「あっ……」

ブラの上から大きな手のひらで膨らみを包み込み、形を確かめるように押し揉まれる。すらりと長い指先が乳房に食い込み、巧みにこねる。布越しの感覚にもどかしさを覚え、胸の先

端が甘ったるく疼いた。

彼は私の疼きを察したのか、布越しに先端をカリカリと指先で引っ搔く。

「あっ」

身体が小さく跳ねて、自然と吐息が漏れた。

「ここ、好きなんだ？」

彼は、顔を真っ赤にしている私の羞恥心^{しゆうちしん}をさらに煽るように尋ねる。

「分かんない……っ……」

「そうだね。じゃあ、今日は結乃の好きな部分をたくさん見つけて可愛がるよ」

涙目になる私に優しく微笑み、スマートな動きでブラのホックを外した。そして、乳房を揉みしだきながら硬く反り立つ乳首に舌先を伸ばす。

「ああっ！」

柔らかくて温かな舌先が頂^{いた}に触れた瞬間、固く瞑^{つみ}った瞼^{まぶた}の裏に火花が飛んだ――

第一章 十年越しの恋

都心から電車で十五分の場所に、私、秋月結乃が働く航脈貿易株式会社（こうみゃくばいりゅうがいき）のビルがある。社名は、『世界の物流の大動脈になり、新たな富を生み出す』という企業理念から生まれたらしい。

五階のフロアの一角で、私はパソコン画面に向き合い、一心不乱にキーボードを叩く。

仕事中は邪魔にならないよう、背中まである緩く巻いた焦げ茶色の髪をバレッタでひとつに束ねている。しつかりめのメイクは、白い肌のせいで顔色が悪く見えないようにするためだ。とはいえ、目がまん丸でどこことなく童顔なので、年齢よりも若いと思われることが多い。

大学卒業後、航脈貿易で働き始めてから早六年。私は輸出部門の事務員として働いている。

商品の受注や輸送、通関の手続きに代金の回収、さらにはクレーム処理など、その業務は多岐にわたる。申告や送金などの請求すべてに数字が関わり、荷物の数を一つ間違えただけで通関に通らなくなるほど、正確さが求められる仕事だ。些細なミスが大きな損害に繋がることもあり、書類は必ず人を変えて三重チェックをかけている。

そんな中、上がってきた書類チェックでミスを見つけた私は、その修正に追われていた。

「秋月！」

突然張り詰めた低い声で名前を呼ばれて、反射的にビクツと体を震わせてキーボードから手を

離す。

振り返るよりも早くやってきた轟部長（とろろく）は、私のデスクを力いっぱい叩いた。

「お前、まだ修正終わってないのか？ 通関手配は今日までだつて言つたよなあ？」

「も、申し訳ありません。あと少しで終わりますので」

「チンタラすんなよ。若くてちよつと可愛いからって許されるほど、この仕事は生やさしくないからな」

「すみません……。大至急修正します」

素直に頭を下げて謝罪する私を見て気を良くしたのか、轟部長は「急げよ」とだけ言い残して、自席へ戻っていく。私はやれやれと思いつながら、部長の背中を目で追った。

五十代バツイチ。皺だらけの白いワイシャツの襟元はいつも黄ばんでいる。整理整頓が苦手なのか、デスク回りには書類の束が積み重なり、いつ雪崩（ゆなだれ）が起きてもおかしくない。

部長が作成した書類に複数の不備が見つかったのは、ほんの数時間前のこと。荷物を輸出するためには、出荷から代金回収までさまざまな書類が必要だ。輸出した貨物が相手国の輸入通関を通らなければすべて没収される可能性があるし、数量の間違いが命取りになることも。

「まったく。自分のミスを棚（たな）に上げて何様のつもり？ あの人、あなたを口説き落とせなかったのをまだ根に持つてるのよ。あんなの気にしちゃダメよ」

先程の会話を聞いていた隣の席の小田（おだ）さんが、すかさずフォローしてくれる。

私よりも三歳年上の小田さんは、私が新卒の頃の教育係だった。黒髪のショートボブに目鼻立ち

のハッキリした美人だ。仕事ぶりは完璧で、さらに面倒見も良い。パワハラまがいのことをされても頑張っていられるのは、小田さんという心強い先輩がいてくれるおかげだった。

「ひとりで大丈夫？ 手伝おうか」

「いえ、もうすぐ終わるので大丈夫です。ありがとうございます」

心配そうに尋ねる小田さんに、私は笑顔を向ける。

「秋月ちゃん、頑張るのはいいいけど無理しないでよ。たまには誰かに頼りなさい」

「はい」

小田さんの言葉に頷き、再びパソコン画面に向き直る。そのとき、どこからか痛いほどの視線を感じた。

目を向けた先にいたのは轟部長だ。険しい顔で、自分の左手にはめた時計を右手の人差し指でトントンツと叩いている。

どうやら、しゃべっている暇があるなら早く修正をしろと、私を急かしたいらしい。

頬が小刻みに震えそうになるのをぐっと堪えて、私は小さく頭を下げて部長から目を逸らした。

轟部長の当たりが強くなったのは、半年ほど前からだ。

「彼氏いるのか？」「秋月、お前は可愛いな」「若いのに仕事が丁寧で偉いぞ」と、最初はどちらかといえば好意的だった。

けれど、業務時間外にしつこく食事に誘われて、その度にやんわりとお断りしていたら、ある日突然態度を一変させたのだ。

今日のように自分のミスを私に押し付けてくるのはもちろん、ひとりではできない量の仕事を任せるようになった。さらにその日の轟部長の機嫌によって、同僚の前であらぬ叱責や侮辱を受けたりもする。

私は轟部長によって、日々精神的に追い込まれつつあるのを感じていた。

「あゝ、終わった」

誰もいない静かなフロアに私の声が響く。

あのあと、書類の修正が無事に終わりホッとしている私に、轟部長は新たな仕事を持ってきた。

結局、すべての業務が終わったのは時計の針が二十二時を回った頃だった。

大きく背伸びをしたあと首を回して、背もたれに身を預けて凝り固まった肩を揉む。

早く家に帰ってゆっくり休もう。そう思っているのに、心身ともに疲れ果てているせいか、なかなか椅子から立ち上がれない。

ずっと座り仕事だったせいでふくらはぎがむくみ、足の甲にまで違和感がある。

明日に疲れを残さないためにもゆっくりとお風呂に入ってマッサージしないと……

そんなことを考えていると、デスクの上のスマホが音を立てて震えた。画面には、高校時代からの親友・真野奈々（まのなな）の名前が表示されている。

「もしもし」

『結乃、お疲れ〜！ 今って家？』

奈々の甲高い声が鼓膜を震わせる。高校時代と変わらない明るい話し声になんとかホッとして、胸の中が温かくなる。

「ううん、まだ会社。でも、私ひとりだから大丈夫だよ」

『えっ、こんな時間まで仕事？　ちよっとアンタ、大丈夫？　そんな働き方してたらいつか体壊すって』

「だよね。正直、ちよっと疲れてるかも」

奈々とは卒業後もこうやって頻繁に連絡を取り合う仲だ。絶対的な信頼を寄せている親友にだけは弱音を吐ける。

『そっかそっか。じゃあ、息抜きがてら週末にある高校のクラス会、一緒に参加しようよ』

「クラス会？」

『そう。急遽決まったみたいで、さっき連絡があったんだ。結乃は今まで一回も参加してないでしょ？　一緒に行こうよ！』

「うーん……でも、賑やかな場ってちよっと苦手なんだよね。それに、高校の友達でいまだに連絡取り合ってるのって奈々だけだし」

元々、私は友達の多いタイプではない。人付き合いが大の苦手というわけではないけれど、あまり自分から連絡を取ったり遊びに誘ったりすることをしないのだ。そのせいで、高校時代の友達のほとんどは、卒業後はなんとなく疎遠になってしまっている。

『あたしだって、そんなにたくさんの子と繋がってるわけじゃないって！　それにさ、もしかした

ら陽介くん^{ようすけ}に会えるかもしれないじゃん？』

『陽介』という名前が出た瞬間、私の胸の中で小さな泡が弾けて、自然と背筋が伸びる。

「……待つて。なんでそこで陽介くんの名前が出てくるの？」

『だってアンタ、高校のとき陽介くんのこと好きだったでしょ？』

「えっ、なっ、ち、違っよ！」

平静を装おうとしていたのに、明らかに声が上ずってしまう。これじゃ肯定しているのと一緒に。『いいよ、無理に隠さなくても。それに、アンタたちが両片思いだったってこと、サッカー部の中で知らない人はいなかったし』

「りよ、両片思い？　なにそれ、ありえないよ！」

ぶわっと顔が赤くなったのが自分でも分かり、右手でパタパタと火照る顔を扇ぐ^{あお}。

『はいはい。で、行くってことでいいよね？　サッカー部の連中も、アンタを連れてこいつてうるさいからさ。じゃ、時間と場所はあとで連絡するから』

「ちよっ、奈々！　待つ……」

ブツツと一方的に切られる電話。奈々は昔から、一度言い出したら絶対に考えを曲げない。

私は再び椅子の背もたれに体を預けて目を瞑り、やれやれと溜息を吐いた。その瞬間、瞼の裏に高校時代のある人の笑顔が浮かぶ。

早瀬陽介^{はやせ}。彼は誰もが認めるサッカー部のエースだった。

涼しげな奥二重の瞳に黒く焼けた肌。形の整った白い歯に、愛くるしい子犬みたいな無邪気な笑

顔。眩いほどにキラキラと輝く彼の姿が鮮明に蘇る。

高校時代、私と奈々はサッカー部のマネージャーをしていた。入学早々仲良くなった奈々に男子が苦手だと話すと、『それなら荒療治だ！』と半ば無理やりサッカー部のマネージャーに立候補させられたのだ。

サッカー部員は六十人ほど。その中でも陽介くんは常に女子の憧れの的で、容姿だけでなく、性格も人を惹き付ける不思議な魅力があった。それでいて、モテることをひけらかすことなく、誰に対しても平等で優しく、非の打ちどころがない。

当時の私は、校内の女子たちを虜にする陽介くんに苦手意識を持っていた。彼個人が苦手なのではなく、自分とはまるで正反対の彼とどうやって接すればいいのか分からなかったのだ。

けれど、そんな私の気持ちを知ってか知らずか、彼は度々私に声をかけてきた。

ふと思い出すのは、十年前の暑い夏の日。他校での練習試合が終わったあと、私はベンチに戻ってきた部員に冷えたスポーツドリンクのペットボトルを順番に手渡していた。

七月の前半だというのに最高気温は三十五度を超え、地面から陽炎が立ち上り、吸う息も熱く感じるほどの猛暑日。

試合の途中から頭がガンガンと痛んで脱水寸前なのに、私は持ってきていた飲み物をすべて飲み干してしまっていた。

みんなに飲み物を渡し終えたら自販機を探して水分補給をしないと……と思っていたとき、列の

最後にやってきたのが陽介くんだった。

『お疲れさまでした』

平静を装ってペットボトルを手渡すなり、陽介くんは私の顔をまじまじと覗き込んだ。

『顔真っ赤じゃん。秋月も水分取りな。倒れるぞ』

陽介くんはペットボトルのキャップを開けて、私に差し出した。

『私は大丈夫だよ。陽介くんが飲んで』

陽介くんはさつきまで炎天下の中でフルに試合に出て、大粒の汗をかいている。そんな彼の飲み物をもろうわけにはいかないと慌てて断った。

『秋月がそう言っても、俺が大丈夫じゃない。ほら、早く』

いつも優しい彼にしては珍しく、頑なに譲らないという意思が感じられた。

『……ありがとう』

私は素直に受け取ってお礼を言い、スポーツドリンクを遠慮がちに口に含んだ。カラカラに渴いていた喉が一気に潤い、身体に水分が満ちていくのを感じる。熱中症で倒れたら、それこそサッカー部のみんなに迷惑をかけてしまっていただろう。大事にならなかったことに胸を撫で下ろす。彼は私からペットボトルを受け取ってキャップを閉めると、私の頬にぺたっとペットボトルを押し当てた。ひやっと冷たい感覚が気持ちいいのに、なぜか身体の奥の方が熱を帯びる。

『あの……』

『それ、あげる。あんまり無理すんなよ』

涼しげな瞳が私を捕らえて離さない。

心臓が破裂しそうなほど高鳴って、呼吸がしづらくなる。

そのままベンチの奥へ歩いていく彼の背中を、私はドキドキしながら目で追った。

多分、私が恋に落ちたのはあの瞬間だったと思う。遅い初恋だった。

「——あのう、そろそろ閉めますが、よろしいでしょうか？」

思い出に浸っていた私は、紺色の制服を着た守衛さんの声でふと我に返った。

「あつ、すみません。今出ます」

私は弾かれたように、大慌てでバッグを掴んで立ち上がった。

それから数日後の土曜日、いよいよクラス会の当日だ。

着て行く服と一緒に買いに行こうと奈々に誘われ、私は開店と同時に洒落な洋品店に足を踏み入れた。普段は仕事と家の往復ばかりだし、元々インドアな性格で誰かと出かけることはほとんどない。正直、何を着て行けばいいのか悩んでいたため、アパレル勤務の奈々の誘いは渡りに船だった。

「これなんていいんじゃない？」

店に入るなり、奈々は私に似合いそうな服をピックアップしてくれた。

「わあ、お洒落で素敵！　ただ、かなり身体にフィットしそうだよね。奈々には似合いそうだけど、私なんか着こなせるかな……？」

私は、背中ががつつり開いたタイトなワンピースを見て悩む。

奈々は美人だ。肩まである黒髪のワンレンボブにキリツとした奥二重の瞳。目元の泣きぼくろが色っぽい。今はボルドー色の細身のロングワンピースを着こなし、黒いブーツを履いている。

身に着けているアクセサリーはすべてゴールドで統一されていて、百七十センチという高身長もあいまって、モデルのような洗練された出で立ちだ。

「結乃ってば、昔から自己評価低すぎでしょ。アンタみたいに細身なのに巨乳って、なかなかいい逸材よ！　顔だってこんなに可愛いのに、主張しないなんてもったいないわ。宝の持ち腐れじゃない」

「奈々ってば、褒めすぎだよ」

「言っとくけどあたし、付度とかお世辞言ったりしないタイプだからね」

「ふふっ、ありがとう」

奈々はいつだって自信のない私を褒めてくれる。

奈々の言う通り、私はどちらかというと自己評価も自己肯定感も低い。その原因はきっと、子供の頃に父から受けたモラルハラスメントだ。高校入学前、両親が離婚するその日まで自己否定され続けたせいで、大人になった今も言いたいことを呑み込み、ぐっと我慢してしまう。

父から解放されたあとも、私は自信のなさを努力で補おうとする癖がついた。その名残がまだに残っているのだろう。

色々悩んだ結果、私は奈々と相談して黒いシンプルなラインのロングワンピースと、その上に羽織るベージュのカーディガンを購入した。

買った物を終え、奈々におすすめされたお洒落なカフェに移動する。店のシンボルツリーらしいクスノキの周りに配置されたテラス席に案内される。木のぬくもり溢れる開放的な空間は、何時間でもいられそうなほど居心地がいい。

しばらくすると、注文したランチプレートが運ばれてきた。プレートに載ったカラフルなサラダと付け合わせのポテト、それに厚切りのベーコンやトマトがたくさん入ったアメリカンクラブハウスサンドだ。

一口頬張ると、口の中いっぱい旨味が広がり、自然と笑みが漏れた。

「美味しい！」

味を楽しむように噛みしめながら食べる。こうやってたまに食べるジャンクフードは至福だ。

「でしょ！　ここ、初めて知ったときから、結乃が喜びそうだなって思ってたの」

奈々は得意げに鼻を鳴らす。楽しく会話をしつつ食事に舌鼓したづみを打ち、デザートのアイスを食べ終わったとき、奈々が突然申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「あ、そうそう。実は言い忘れてたことがあって」

「なに？」

「実は陽介くんなんだけど、今日はやっぱり来られないみたい。結乃のこと誘っておいでよね」

眉を下げる奈々に、私は微笑んで首を横に振った。

「いいの、気にしないで。陽介くんが忙しいのは分かってたから」

「今や、あの『アークレイ』の御曹司だからねえ」

奈々は遠い目をしながら言う。

『アークレイ』は国内で知らない人はいないほどの大企業だ。新しい架け橋を世界に確立させるという社名通り、世界市場を股にかける総合商社。ここ最近では、北米の大企業と業務提携を結び、大規模なデジタル事業を成功させているらしい。

陽介くんは、高三で母親がアークレイの社長と結婚したため、旧姓の佐原さはらから早瀬に名字が変わった。

当時、陽介くんは周りから御曹司になったともてはやされていたが、その度に複雑そうな顔で笑っていたのを今も覚えている。

それから、私と同じ地元の国立大を目指していた陽介くんの進路は、都内にある名門私立大学に変わった。高校卒業後は希望の大学へ進学して経営学を学び、継父が社長を務めるアークレイに入社したと奈々から聞いた。

「結乃ってさ、卒業してから陽介くんと連絡取り合っていないの？」

「……うん。私と陽介くんは、サッカー部員とマネージャーっていうだけの関係だもん。奈々が思ってるようなものじゃないよ」

私は第一志望だった国立大へ進んだため、彼との接点はなくなった。そして、彼への初恋をこじ

らせたまま、二十八歳を迎えている。

初恋相手を超える人にはいまだに会えず、この歳まで彼氏の一人もいないなんて……

とはいえ、私の心の中にはいまだに陽介くんがいる。早く忘れて前を向かないといけないと頭では分かっているけど、心が言うことを聞いてくれないのだ。

この先、心惹かれる男性と出会えるのだろうかという不安はある。けれど、出会いがないことをただ嘆いているだけでは、何も始まらない。

自分から積極的に動かなければチャンスは舞い込んでこないと今までの考えを改め、今回のクラス会に参加すると決めたのだ。

「よしっ！ 結乃、今日は気合入れていこう！ 十年ぶりの再会で新たな恋が始まるかもしれないしね」

「うん！」

私は奈々の言葉に力強く頷く。

「あつ、今のうちに言っとくけど、今日のクラス会で誰かという感じになったら、あたしのことは気にしないで二人で消えなさいね？」

「え？」

「チャンスはものにしなくちゃ！ 独身同士ならワンナイトラブもありよっ」

まだ一滴もアルコールを摂取していないにもかかわらずテンションのおかしな奈々に、苦笑いを浮かべる。

「分かった。もしそんなことになったら、そうさせてもらうね」

私に限ってそんなことは起こらないと、このときはそう確信していた。

クラス会は、恵比寿駅から徒歩五分の場所にある大衆居酒屋で行われた。

暖色の照明にゆったりとした掘りごたつ。壁には焼き鳥メニューがずらりと並んでいる。

「いやー、まさか結乃ちゃんが来てくれるとは思わなかったよ」

両隣をサッカー部の陽気な男子に囲まれて、私は緊張で強張った笑みを浮かべていた。

クラス会には、男子十五人、女子十人の合計二十五人が集まった。全員で写真撮影をしたあと、各々飲み食いしながら近況報告を交えて談笑する。

「お前、もうさっきの集合写真とかSNSにアップしてんのかよ」

「友達だけの限定公開だからべつにいいしょ。つーか、さっき陽介に自慢しようと思って、【結乃ちゃん来た！ 可愛い！】ってメッセージ送っちゃった。あ、はやっ。もう既読付いてる。アイツ、本当分かりやすいよなあ」

突然出た陽介くんの名前にドキッとする。

私ってば、なにを期待しているんだろう。彼が今日来ないと知っているのに……

何度かビジネス系の雑誌で陽介くんの写真を見かけたことがある。昔のような幼さは消え、頼もしそうな大人の男性に成長していた。けれど、端整な顔立ちは今も健在で、彼が掲載された雑誌は売り上げ部数が極端に増えたらしい。

「俺らの中で一番出世したのって、やっぱり陽介だよな。アークレイの御曹司とかマジで羨ましい。でもさ、アイツって社長の実の息子じゃないんだよな？ そうなると御曹司とは言わないのか？」

「いや、血の繋がりの有無なんて関係ないんじゃないかね？ 顔良し性格良し、おまけに家柄と仕事もゲットだろ？ 陽介って無敵すぎじゃね？ 毎日とつかえひつかえ綺麗な女抱きまくってんだろ？ なあ。人生イーजीモードじゃん！」

時間が経つにつれお酒が進み、みんなの声のボリュームが大きくなる。

「えっ、来たの？ めちゃくちゃ久しぶりじゃん！」

そのとき、向こうの方の席が急に騒がしくなった。けれど、私はそちらには目も向けず、緊張を紛らわせるようにグラスに入ったレモンサワーをちびちび飲む。

「ほんと陽介が羨ましいよ」

両隣の男子の、陽介くんの話題は今もまだ続いていた。

「ズルいよなあ。俺なんてどんなに頑張ってもいまだ平社員だぜ？ 給料だって全然上がらないしよお」

高校時代の二人は、ムードメーカーで明るく常にポジティブなタイプだった。けれど、今はアルコールのせいaka愚痴ばかりだ。

悪酔いしそうな彼らを見かねて、私は温かいお茶を注文する。二人はなおも私越しにあれこれ愚痴をまき散らしたあと、真つ赤な顔を私の方にぐぐつと近付けて尋ねた。

「ねえねえ、結乃ちゃんも陽介のことズルいと思わない？」

「ええと……私は陽介くんをズルいとは思わないかな。陽介くんは昔から努力家だったから、相当頑張ったはずだよ。アークレイがここ最近さらに業績を伸ばしてるっていう話をよく聞くけど、それは本人の頑張りがあったからなんじゃない？」

陽介くんは自分が御曹司になったからといって、その立場に慢心したり、仕事に手を抜くような人ではない。サッカー部のエースとしてもはやされていたときだって、人知れず朝練に励み、放課後になると誰よりも早くコートへ立って汗を流していた。陽介くんはそういう人だ。

そのとき、私たちのいる掘りごたつのそばに誰かがやってきた気配がした。

頼んだお茶が届いたんだろうかと、ふと顔を上げる。そこには皺ひとつないグレーのスリーピースのスーツを着た、すらりと背の高い男性がいた。

私は思わず息を呑んだ。

「秋月、ひさしぶり」

陽介くんは精悍な眼差しを私に向けて微笑んだ。

雑誌越しではなく、実物の彼の姿を見るのはおよそ十年ぶりだ。涼しげな目元と艶やかな黒髪は十年前と変わらないものの、その顔つきは私よりずっと大人びて見えた。

低くて男らしい声すらも懐かしい。

「あ……」

突然の彼の登場に、私は雷に打たれたような衝撃を受けた。十年経ってもなお、いや昔以上に彼

は圧倒的な存在感を放っている。

「はっ？ えっ、陽介じゃん!!」

「マジかよ！ サブライズ登場!」

彼の登場に気付く、その場がどつと盛り上がる。

一方の私は混乱しすぎてどうしたらいいのか分からず、助けを求めるように遠くのテーブルにいる奈々に目を向けた。

私に気付いた奈々は、『頑張れ!』と身振り手振りで訴えてくる。顔は赤く、どうやらすっかり出来上がっているようだ。強そうに見えるが、奈々はお酒に弱い。

なおも奈々は私に何かを伝えるかのようにジェスチャーを送ってくる。

それを見た近くの席の女子が奈々を指差して、「顔芸してる! マジ、すごいんだけど!」と手を叩いてゲラゲラ笑う。確かに面白い顔をしていて、私もつられてクスクス笑った。奈々のおかげで少しだけ緊張が和らいだ。

いつの間にか、陽介くんはピカピカの革靴を脱ぎ、笑みを浮かべたまま私の隣へやってきた。

それを見て気を遣ったのか、隣の男子が素早く席を移動する。

「隣、いい?」

「あつ、うん。どうぞ」

彼はスーツの上着を脱いでから私の隣に腰かけた。ふわりと香る甘い匂いにドキツとする。

隣に座った彼のおでこ首筋には大粒の汗が浮かんでいて、それをポケットから取り出したブラ

ンド物のハンカチで拭っていた。その姿にも男性的な魅力を感じてしまうのだから困ったものだ。

それにしても、今は十月で汗ばむような気温ではないのに、どうして陽介くんはこんなに汗をかいているんだろう。

不思議に思っている私の視線を感じ取ったのか、陽介くんは肩を竦めた。

「実は秋月が来てるって知って、飛んできた」

思いがけない彼の言葉にまたドキツとして心臓が跳ねる。

それってどういう意味なの……?

少し悪戯^{いたづら}っぽく笑うその顔が高校生のときの陽介くんとリンクして、胸がキュツと締め付けられる。そのとき、注文していたお茶が運ばれてきた。店員さんにお礼を言って受け取り、私は酔いの進んだサッカー部の男子二人にお茶を差し出す。

「お茶、よかったら」

「ありがとう、結乃ちゃんて昔からマジで気が利くんだよな。ホント神! 当然、付き合ってる人っているよね?」

「え? ええと……」

思わず苦笑いを浮かべる。今どころか、今までお付き合いした人はひとりもない。

どう答えようか迷っていると、隣に座る陽介くんが頬杖を突き、私の顔を覗き込んだ。

「それ、俺も知りたい」

昔と変わらない澄んだ切れ長の黒い瞳が私を捕らえる。意味深な視線を向けられてドキドキして

しまう。

どうしてそんなことが気になるんだろう……

でも、明るくてノリのいい陽介くんのことだ。きっと場の雰囲気に合わせているだけだろう。

「……いないよ」

答えた瞬間、なぜか場が湧いた。

「マジか!? え、じゃあ、俺とかどう? 絶対に幸せにするから!」

「おいおい、抜け駆けすんじゃねえぞ!」

「いやいや、お前彼女いんだろ!」

酔っぱらった二人がふざけて言い争う隣で、陽介くんは「本当にいないの?」と真面目な顔で念を押してくる。

「……うん。本当」

小さく頷き、私は黙り込んでグラスに視線を落とした。

なんだか今も隣に陽介くんがいることが信じられず、まるで夢を見ているみたいな気持ちになる。そもそも、来ない予定だった彼がどうしてここに……?

しかも、サッカー部で親しくしていた友達だったたくさんいるのに、わざわざ私の隣を選んで座るなんて。

今更ながらメイク崩れや顔の赤みが気になってしまう。陽介くんが来ると分かっていたら、トイレでメイク直しをしたのにと心の底から悔やみつ、自分の中にそんな乙女な部分があったんだと

くすぐったい気持ちになる。

十年経った今も、私は彼にこんなにも心を揺さぶられてしまっているんだと自覚する。

陽介くんが隣にいると思うだけでなんだか落ち着かず、意味もなく食べ終えた食器を隅に寄せたり、テーブル周りの紙ごみを一か所にまとめたりする。

それでも手持ち無沙汰になってしまった私は、グラスに半分残ったレモンサワーを一気に飲み干した。胃の奥が一気にカッと熱くなる。

すると、隣からふつという笑い声がして、顔を彼に向けた。

「昔と変わってなくて、なんか安心した」

「え?」

「いや、なんでもない。秋月が酒飲んでるのって、なんか不思議」

陽介くんの言葉に照れくさくなりつつ、私はふふつと笑う。

「そうかな? でも、私もう二十八だよ」

「確かに十年ぶりだもんな。元気にした?」

「うん」と答えてからあることに気が付く。

「あ、ごめんね。陽介くん、なに飲む?」

みんなより遅れてやってきた陽介くんはまだ飲み物を頼んでいなかった。私は陽介くん近くにあったメニュー表を差し出した。

「ありがとう」

「言ってくれば私が頼むよ」

「いいよ、氣遣わなくて。自分で頼む」

陽介くんは店員さんと呼び、丁寧な口調でノンアルコールビールと私をお願いしたカルピスワーを注文した。

「陽介くんはお酒飲まないの？」

「普段なら呑むけど、今日はやめとく」

「そっか」

飲まない理由は分からないけれど、きっとこのあとになにか予定があるんだろう。あまり詮索しない方がいいと考え、私はそれ以上尋ねるのをやめた。

私たちは運ばれてきたノンアルコールとカルピスサワーで乾杯し、十年ぶりの再会を祝った。カチンツとグラスの触れ合う心地のよい音のあと、陽介くんが尋ねた。

「今って仕事は？」

「小さな貿易会社で働いてるよ」

「へえ。なんていう会社？」

「航脈貿易っていうんだけど、知らないよね？」

私の言葉に、陽介くんはグラスを持ち上げていた手を止めて目を丸くする。

「え、航脈？ 知ってるよ。北本社長とは懇意にさせてもらっているから」

「そうなの？」

まさか北本社長まで知っているなんて、さすがアークレイの御曹司なだけあって顔が広い。

それから私たちは互いの近況を報告し合った。

「そっか。貿易事務じゃ英語が必須だな。秋月、高校のときから英語得意だったよね？」

「得意ってほどでもないんだけど、好きだったよ」

「いや、あれは得意って誇っていいレベルだって」

遠い昔の私のことまで覚えてくれていた事実が胸が熱くなる。

陽介くんとの会話は楽しくて、ついついお酒が進む。元々お酒に強いこともあり、妙な高揚感が湧き上がってきた。

「陽介くんは今、アークレイの副社長なんだね。すごいなあ」

彼から受け取った名刺をまじまじと眺める。

明らかに上質な紙の名刺には【アークレイ 副社長 早瀬陽介】と記されている。

「すごくないよ。さっきみたいに御曹司だって羨ましがられるけど、社長と血の繋がりはないし。一部の人は、副社長になった今も俺をアークレイの人間だと認めてくれないから」

力なく笑う横顔に陰が落ちた。どうやら先程の会話は、陽介くんの耳に届いていたようだ。

以前にもこういうことがあった。陽介くんが早瀬の姓になって校内が騒ぎになったときにも、みたいに切ない気持ちを押し殺したみたいな顔で無理して笑っていた。

「そんなことないよー」

少しでも励ましたくてたまらず声を上げると、陽介くんは驚いたように目を見開いた。

「副社長になれたのは、陽介くんの努力の結果だよ。高校時代もレギュラーなのに人一倍練習して
たし、引退後は受験勉強だつて頑張つてたよね？ 私、すごく尊敬してたの」

これまで言えなかったことをまくしたてるように一気に言い放つ。
「だから、他の人がなんて言っても、私は陽介くんの味方だよ！」

力強く言い切ってから、熱くなりすぎてしまったと我に返ると、陽介くんがふっと笑みを漏ら
した。

「さつきも庇ってくれてたよな。ありがとう」

「ううん、お礼を言いたいのは私の方。高校時代もたくさん助けてくれたよね。ありがとう」

「いや、それ逆。俺が秋月に助けてもらつてたんだよ」

「私が陽介くんを……？」

目が合った瞬間、トクンツと心臓が鳴る。

酔いが回り始めたのか、頬がじんじんと火照る。

「そう。俺さ——」

陽介くんが口を開いたのと同時に、奥の席の女子二人がやってきて「ねえねえ、陽介くん！」と
彼に声をかけた。

「久しぶりだし、色々しゃべろう！ あたしたちのテーブルおいでよ」

高校時代も華やかだったけれど、当時よりさらにあか抜けた二人は、バッチリメイクに艶やかな
髪のを緩く巻いた港区女子っぽくなっていた。同性の私から見ても抜群に可愛い。

きつと陽介くんも私とおしゃべりするより、彼女たちといった方が楽しいだろう。

「いや、遠慮しとく。俺、この席にいたいんだ」

「なんでえ？ ちょっとでいいから来てよお」

二人は屈んで陽介くんの腕を掴み、無遠慮にグイグイ引っ張る。

「ごめん、離して」

やんわりとした口調ながらも有無を言わせぬ強さがあり、二人は渋々彼から手を離れた。

「来てくれないなら連絡先だけでも教えてよ。それと、写真撮ろっ？」

スマホのカメラを起動しようとしている彼女に向かって、陽介くんはハッキリと言った。

「悪いんだけど、連絡先交換も写真撮ったりもできないから」

「えゝ、ちょっとぐらいいいじゃんゝ！」

「ツーショット写真とか出回って誤解されたら色々困るから」

アークレイの副社長ともなると、女性スキャンダルに敏感になるのかもしれない。鉄壁ガードの
対応に感心しつつも、自分とは違う世界で生きている彼を少し遠く感じてしまう。

「えー」

陽介くんは拒絶された女子二人組が不服そうに唇を尖らせていると、ベロベロに酔った奈々が遠
くの席から叫んだ。

「ねえ、アンタたちこっち来なさいよー！ あたしが陽介くんよりいい男を紹介してあげるから
さあゝ」

二人は目を見合わせると、「そうしょっか？」と、気を取り直した様子で奈々のもとへ向かう。
「あの、陽介くん。あっちの席に行かなくて大丈夫？ もし私のことを気にしてくれてるなら……」
陽介くんは昔から周りをよく見ている。私がひとりになってしまふことを心配しているんだしたら申し訳ない。

「違う。俺、秋月と——」

陽介くんが何かを言いかけたタイミングで、テーブルの上にある私のスマホが震えた。どうやら電話のようだ。休日の夜に電話を掛けてくる相手などないため、訝しく思いながら画面を確認した瞬間、顔が引きつった。相手は轟部長だった。

「出ないの？」

「あつ、うん。ごめん、ちょっと抜けるね」

ふわふわといい気持ちになっていた私の頭の中が急速に冷えていく。

パンプスに履き替えて店を出る間も、警告を発するように心臓が不快な音を立てて鳴り続ける。休日に轟部長が電話をかけてきたことは今まで一度もない。もしや仕事でミスがあつたのかもと不安に駆られながらも電話に出る。

「……もしもし、秋月です」

『出るのが遅いぞ！ もしかして男とデートか？ まったく、これだから今の若者は……仕事は半人前のくせにやることはやってるんだからなあ？』

スピーカー越しの轟部長の背後がかなり騒がしい。もしかしたらどこかでお酒を飲んでいるのか

もしれない。

今はプライベートだし、私が何をしたいようが轟部長には関係がない。お門違いで理不尽な物言いに憤りを覚えるも、男性の怒鳴りつけるような声にかつての父のトラウマが蘇りそうになり、萎縮してしまう。

「……申し訳ありません。あの、今日はどのようなご用件でしょうか？」

『ああ、なんだ？ 貴様はこの俺様に、用事がないなら電話をかけるなど言いたいのか!?』

「そういうわけでは……」

ギョッと目を瞑る。反論したいけれど、威嚇するような怒声に恐怖を覚える。

『出来損ないのお前を見捨てずに育ててやったのはこの俺だろう!? それなのに、恩を仇で返しやがって!』

轟部長は完璧に酔っぱらっているようで、ところどころ呂律が回っていない。

十年ぶりの陽介くんととの再会で穏やかな気持ちだった数分前が天国だとしたら、今は地獄だ。轟部長のねちっこい嫌味と自分語りが電話越しにしばらく続く。

黒い薄手のワンピース一枚で外に出てきてしまったせいで肌寒い。暖房の効いた店内でカーディガンを脱いしてしまったのが仇になった。少しでも身体を温めようと、私は右手で腕を擦る。

『俺だってなあ、怒りたくて怒ってるんじゃないんだぞ。これはお前のためでもあるんだ！ 秋月。それで、俺が怒ってる理由が分かるか?』

「いえ……申し訳ありません」

『俺がなにに対して怒ってるのか聞いてるんだよ！ お前はそれを分からないまま謝り続けるのか!? 俺をナメんのもいい加減にしろよ!? もういい!』

轟部長は一方的に電話を切った。その直後、必死に抑えていた感情がぐっと込み上げてくる。言い返せなかった自分への情けなさと、ようやく解放された安堵感で目頭が熱くなる。だけど、轟部長の言葉で泣いたりしないと必死になって唇を噛みしめた。

そのとき、店の引き戸が開かれた。

「あ、すみません……」

出入りの邪魔にならないように身体をずらすと、店から出てきたのは陽介くんだった。

「大丈夫か？」

その手には私のベージュのカーディガンが握られている。

「どうして……？」

目が合った瞬間、ふいにポロリと涙が零れて、私は慌てて手の甲で涙を拭いた。

弱みを見せたくなかったわけではなく、陽介くんを困らせてしまうのが嫌だったのだ。

「店の中を探したけどいいないから、外かと思って」

陽介くんは私の背中にふわりとカーディガンをかけてくれた。

昔から私はいつもこうやって彼に助けてもらっていた。私が望んでいることやしてもらいたいことを、彼は不思議と叶えてくれるのだ。

「ありがとう。私なら大丈夫だよ。寒いし、中戻ろう？」

彼に心配をかけないように微笑んで一歩踏み出すなり、おもむろに手首を掴まれた。

彼の手のひらは想像以上に大きくて温かく、手を通して彼の熱が私にまで伝わり身体を熱くさせる。

「全然大丈夫そうに見えないんだけど」

顔を覗き込まれてつい目を逸らす。

「本当に大丈夫だよ」

「秋月がそう言っても、俺が大丈夫じゃないから」

あの頃と同じ口調の彼の言葉が胸に優しく染み渡り、ずっと秘めていた甘酸っぱい感情が込み上げる。

彼はそっと私の目尻の涙を指で拭い、労うような眼差しを向けた。私を心から心配してくれているのが伝わってくる。

「家まで送るよ。すぐ戻るからここで待ってて」

「でも……」

優しい陽介くんは様子がおかしい私に気を遣って、送ると申し出てくれたのだろう。けれど、久しぶりのクラス会だし、陽介くんだって本当はまだみんなと一緒にいたいはずだ。

「俺が送りたいだけだから。勝手にごめん。だけど、秋月のそんな顔、他の男に見せたくないんだ」

陽介くんは少し困ったようにそう言って店に戻っていった。

ほどなくして店から出てきた彼の手には、私のバッグが握られていた。会費もまだ払っていないと慌てる私に「秋月の分も払ってあるから安心して」と言う。

それならばとバッグからお財布を取り出して支払うと言っても、彼は受け取らないの一点張り。「ここは俺にカッコつけさせてよ。ね？」

「……分かった。ありがとう」

私はお礼を言い、お財布を引っ込めるしかなかった。

「乗って」

居酒屋の近くのコインパーキングに停められていたのは、誰もが知る海外製の白い高級車だった。ピカピカに磨き上げられた車に驚いて立ち竦む私に、彼は車の助手席のドアを開けて座るように促す。

「ええと、靴は脱がなくても大丈夫？」

「もちろん、そのまま乗って。もしかして秋月の車は土足禁止なの？」

陽介くんは不思議そうな顔をして尋ねる。

「まさか！ 私は車を持ってないから。ただ、こんなに高そうな車に乗るのは初めてで……」

「ああ、そういうことか。気にしないでいいよ」

陽介くんは軽く言うものの、そういうわけにはいかない。どこも傷付いたり汚したりしないように、慎重に助手席に乗り込む。

続けて運転席に乗り込んでエンジンをかけた彼は、心配そうに私を見つめた。

「落ち着かないな。どうかした？」

私はおずおずと陽介くんに目を向ける。

「だって、こんな素敵な車に傷でもつけたりしたら大変だって」

私の言葉に二、三度瞬きをしたらあと、彼はふはつととびつきの笑顔を見せた。高校時代と変わらぬ眩しい笑顔に、心臓がトクンと音を立てて跳ねる。

「なんだ。俺の車に乗ったのを後悔してるのかと思った」

「えっ？ ち、違うよ！」

居酒屋のときよりも砕けた口調の陽介くん。まるで昔に戻ったみたいだ。

「ははっ、冗談だって。で、家まで送っていくとは言ったんだけど、このあとって予定ある？」

「予定はないけど……」

ちらりと目を向けた大画面のカーナビの時計は、二十時十五分と表示されている。だいぶ遅い時間だけど、なにかあるのだろうか？

「ちなみに明日は仕事？」

「ううん、休み」

「そっか。なら、気分転換を兼ねて少しドライブしよう」

彼は言うなり、グッと私の方へ身体を近付けた。途端、ふわりと彼から香る甘いムスクの匂いに息が止まりそうになる。

彼はスムーズに私のシートベルトを締めて、ハンドルを握った。一方の私は、突然彼との距離が

縮まったことに動揺して固まってしまう。

「じゃあ、行くよ」

陽介くんは行き先を告げぬまま、なめらかに車を発進させた。

車は首都高へ進む。社用車で何度か走ったことはあるものの、分岐や出入り口が複雑で常に緊張を強いられる道だ。けれど、慣れた道なのか陽介くんは危なげなくスムーズに車を走らせる。完璧な運転技術のおかげで、車の乗り心地は抜群だった。

「陽介くんはすごいね」

私は思わずポツリとそう口にした。

「なにが？」

「なんでもスマートにこなせるから。運転だって上手だし、女性の扱いだって。シートベルトを締めてくれる人なんて初めてだよ」

「そう？」

彼は肯定も否定もしない。それでいて驕らず、謙遜けんそんもしない。常に冷静で余裕が感じられる。

だから、昔から彼を嫌う人はいない。

「でも、それを言うなら秋月こそスマートでしょ。みんなが大騒ぎしててもテーブルの上を片付けたり、酔っ払いにお茶配ったり。そういう気配りができる優しいところ、昔と変わってないなって思った」

「うーん、気配りっていうか……場の空気を読んで人に気を遣うのは、癖みたいなものだから。本

当はやめたいんだけど」

そう、これは癖だ。周りを見て先回りして行動するのは物心ついたときから始まった。

父の機嫌を損ねないようにするための防衛策で、両親が離婚して父と離れたあとも、その癖が抜けない。

「じゃあ、俺と一緒にいるときだけでも気を遣わなくていい練習してみれば」

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、なかなか難しいよ」

本人を前にしているから言えないけれど、相手が初恋相手の陽介くんだからなおさら難しいのだ。

「なら、秋月が気を遣えないぐらい、俺が目いっぱい甘やかせばいいんだね」

「……っ」

自分に言い聞かせてるみたいな言い方だった。

彼がどんな顔をしているか照れくさくて見られず、ただドキドキとうるさく鳴る心臓の音が一刻も早く収まることを祈るしかない。

しばらく沈黙が訪れたものの、居心地は決して悪くない。きっとそれは、運転する陽介くんがなぜかご機嫌そうだからだ。

車がトンネルに入り、車内がオレンジ色のライトに照らされる。高速道路を走る車の音が心地よく鼓膜を震わせた。

四十分ほど車を走らせ、目的の場所に到着した。駐車場に車を止めて少し歩き、国内最大級の客船ターミナルに入る。

その屋上デッキからは三百六十度のパノラマの夜景を一望できた。

「わあ、すごい……！ 綺麗……！」

眼前に広がる煌びやかな夜景に、私は思わず感嘆の声を漏らす。土曜日の夜ということもあり、広々としたウッドデッキのあちこちにカップルや家族連れがいて賑わっている。

しばらくうつとりと夜景を眺めたあと、記念に夜景を写真に収めた。そのとき、ふいに冷たい海風が吹き、思わずぶるぶると身体を震わせる。

すると、陽介くんは何も言わずにスーツの上着を脱ぎ、私の肩にかけてくれた。スーツにはまだほんのりと彼の体温が残っていて、まるで後ろから抱き締められているような錯覚を起こしそうになる。

「陽介くん、私なら平気だよ」

申し訳なくて断るも、陽介くんは「ダメ」と言っていて聞いてくれない。

「風邪ひかせたくない」

「でも、私に貸したら陽介くんが風邪ひいちゃう」

「平気だよ。秋月も知っての通り、身体は強い方だから。せっかくだし、一緒に写真撮ろう」

彼はスマホを取り出して、片手で器用にカメラを起動させる。

「写真？ え、でも、撮っちゃダメなんじゃ……？」

居酒屋での女子とのやりとりを思い出して尋ねる。

「え、全然ダメじゃないけど」

「そうなの？」

しれっと言っている彼に、私は首を傾げた。

「クラス会のときは、誤解されたら困ることになるからって言ってなかった？」

「言ったよ。でも、秋月は特別だから」

心臓がトクンと震える。危うく勘違いしてしまうところだった。

私と陽介くんはサッカー部員とマネージャーという間柄だったから、そういう意味で特別と言ったのかもしれない。

彼は私にぐっと身体を寄せて、夜景をバックにスマホを構える。

「じゃ、撮るよ」

肩同士が触れ合い、彼の熱がダイレクトに伝わってくる。緊張しすぎた私は、強張る頬を必死になんて持ち上げて笑顔を作る。

「ちよつと表情硬いけど、可愛いからいいか。写真送るから連絡先教えて」

言われるがままに連絡先を交換し、写真を転送してもらう。自分のスマホ画面にも彼と同じ写真が共有されたのが嬉しくて、自然と頬が緩んだ。

勇気を出してクラス会に参加してよかったな……

「写真ありがとう」

お礼を言ってスマホをバッグにしまおうとした瞬間、スマホが音を立てて震えた。

画面に表示された轟部長の名前が目に入った途端、恐怖で手が小刻みに震えた。どうしてまた電

話をかけてきたのかは分からない。出れば再び暴言を浴びせられ、出なくとも会社でねちっこく嫌味を言われるに違いない。

会社の上層部に相談をしても、それが発覚すればパワハラはさらにひどくなるだろう。すぐに部署異動はできないので、今以上に追いつまれるのは間違いない。

大学一年のとき、同居していた母に病気が見つかり、闘病の甲斐もなく半年ほどでこの世を去った。離婚してから離れて暮らしていた父も五年ほど前に亡くなっている。頼れる家族もおらず、今の仕事を失うわけにはいかない。

八方塞がりな状況にどうしたらいいのかと考えあぐねているときだった。

「秋月」

陽介くんの声でハッと我に返る。

「ご、ごめんね。仕事の電話だと思う。あとで折り返せば大丈夫だから」

慌てて言ったところで、ようやく電話が切れた。

そのタイミングでスマホの電源をオフにして、バッグの奥底に押し込む。

「わざとじゃなかったけど、画面見えた。部長が休日のこんな時間に女性社員に仕事の電話をかけてくるのは、普通じゃないと思う」

「そうだよね。でも、私のせいだから……」

轟部長は私以外にも何人かの女性社員に目を付けていたけれど、みんな早い段階で部長をかわしていた。こうなってしまったのは、轟部長に好意を寄せられているのに気付いていながらうまく立

ち回れなかった自分のせいだ。

「もしかして、居酒屋で電話かけてきたのも同じ人？」

「……うん」

これ以上彼に嘘を吐くのは憚られて、私は素直に頷いた。

「詳しいことは分からないけど、それは間違いなくコンプライアンス違反だ。企業として徹底的に対応しないといけない」

彼の表情がみるみるうちに険しくなり、まるで自分事のように憤っているのが伝わってくる。

「でも、それは秋月のせいじゃないから。自分を責めなくていいよ」

彼の言葉が優しく胸に染み渡る。いつだって私の気持ちを汲み取り、欲しい言葉をくれる。

高校生のときからずっとそうだった。だけど、それは私にだけではないのだと、淡い期待を抱きそうになる自分を必死に戒める。

「私、陽介くんに助けてもらってばっかりだね。覚えてる？ 高三の合宿の日のこと」

「ああ、覚えてる」

私はあの日を振り返るように、眼前に広がる夜景をぼんやりと見つめた。

十年前のあの日、私はマネージャーとしてサッカー部の県外合宿に同行していた。

奈々はどうしても外せない用があり、初めて一人で参加することになったものの、普段よりも仕事量が多くてミスを連発。部員のみんなは私を責めることなく優しくフォローしてくれたものの、自分の不甲斐なさに落ち込んでいた。

その夜、私が沈んでいることに気が付いた陽介くんは、『ちょっと外に出ない?』と私を海に誘った。砂浜に二人で座り、寄せては返す穏やかな波の音に耳を傾けていると、『あのさ』と彼が切り出した。

なんだろうと次の言葉を待つ私に、陽介くんは『ごめん、何でもない』と口をつぐんだ。

彼が私を励まそうとしてくれているのだと思った。言葉はなくともただ隣にいてくれるだけで、私は彼の優しさに心癒されたのだ。

「あのとき、ミスばかりの私を励ますために海に誘ってくれたんだよね?」

当時を思い出して尋ねると、なぜか陽介くんは真剣な表情を浮かべた。

「……違うって言ったらどうする?」

「え?」

射貫くような瞳を向けられて心臓が跳ねる。

「あの日、告白するために海に誘ったけど、落ち込んでる秋月を見て、弱つてるところに付け込むみたいだからやめたって言ったら?」

意味深な言葉とともにぐっと距離を縮められて、自然と頬が熱くなる。俳優顔負けに整ったルックスの陽介くんが私の顔を覗き込む。

「ま、まさか。陽介くんってばそんな冗談言って」

心臓が激しく鳴り出し、湧き上がる期待を必死に抑えて、私はあえておどけて言う。
けれど、彼は誘惑するように熱っぽい目を向けて「冗談なんかじゃないよ」と甘く囁いた。

「ただ、その後、母親が再婚して名前が変わって言うタイミングを逃したまま卒業して……俺たちは離れ離れになった。あのときの俺は自分のことに必死で、秋月を幸せにする自信がなかった」

確かにあの合宿のあと、陽介くんは早瀬姓に変わった。ときどき切なげに笑うようになったのもあの頃からだ。私には分からない苦労や重圧を背負っていたに違いない。

真剣な表情を崩さぬまま、彼は続ける。

「今日のクラス会だって、行くつもりはなかったんだ。いつも秋月が参加してないって知ってたから。でも、来てるって連絡が入って、いてもたってもいられなくなつて、仕事を切り上げて店に行つた」

「陽介くん……」

「一分でも一秒でも早く会いたくて、駐車場から店まで全力疾走するなんて馬鹿だよな。でも、今日十年ぶりに秋月と会って、やっぱり俺は今も秋月が好きなんだって実感した」

え……。今、陽介くん……私を好きって言った……?

まるで夢のような展開に頭がついていかない。

海風に乗って彼の方からふわりと甘いムスクの香りがした途端、私の胸は痛いぐらいに高鳴る。

「一緒にいる間、遠回しにアプローチしてたけど全然気付いてくれないから、曖昧な言い方するのはもうやめる。酒を飲まなかったのは、秋月を車で送る名目でふたりつきりになったから。他の女子と連絡先交換しなかったりツーショット写真を撮るのを拒んだのも、秋月に変に誤解されなくなかったからなんだ」

陽介くんの言葉に、喜びの感情が溢れすぎて何も言えなくなる。

「秋月は俺を優しいって言うけど、そうでもないよ。俺が秋月に優しくするのは特別な感情があるから。秋月が好きだからだ」

私を見つめる彼の澄んだ瞳に胸が浮き立つ。

「突然こんなこと言って驚かせて、ごめん。でも、秋月を前にしたら気持ちを抑えられなかった。秋月の気持ちを教えてほしい」

「私……」

陽介くんが私に熱のこもった視線を向ける。

自分の気持ちを口にするのは勇気がある。それでも彼は本音を曝け出してくれた。それなのに、自分だけ胸の内を明かさないのはズルい。

ぎゅっと決意を込めて拳を握りしめ、私は陽介くんを真つすぐ見つめた。十年越しの想いを伝えるのは今しかない。

「私も……好きだったの」

高校時代、私たちはサッカー部の部員とマネージャーという関係だった。けれど、陽介くんはなにかと私を気遣い、声をかけてくれた。誰に対しても優しい彼と言葉を交わすうちに、私は強く彼に惹かれた。

もちろん、それだけではない。今日、十年ぶりに陽介くんに会って、自分の中に秘めていた熱い想いがぶり返した。しばらく会わない間に彼は大人の男性になり、魅力が増していた。見た目も

ちろん、アークレイの副社長となり社会的にも高い地位にいる。

けれど、彼は昔と変わらぬ優しさを持っていた。当時と変わらぬ声で『秋月』と私を呼ぶ声も、くつたなく笑う顔も、そのどれもが私の大好きな陽介くんそのものだったのだ。

「やつぱり……過去形か。十年も経ってるからな」

陽介くんは切なそうに目を伏せる。

「違うの」

私はふるふると首を横に振って言う。そして、意を決して彼を見つめ返した。

「秋月……?」

「私も……今も、好き、だよ」

こうやって男性に自分の気持ちを伝えるのは初めての経験だ。それでも、私は緊張でガチガチになりながらも胸の内を彼に伝える。

「……本当?」

陽介くんは信じられないとばかりに目を見開いた直後、恐る恐る尋ねた。

「もしかして、俺に気を遣って合わせてくれる?」

「ち、違うよ! ただ、陽介くんは昔以上に魅力的になってるし……。私じゃ釣り合わないかなって思っ……それで……」

「釣り合うとかそんなのどうだっていいよ。大切なのはお互いの気持ちだから」

陽介くんは焦ったような表情で言う。

「本当に俺のこと好き？」

「……うん」

目が合った刹那、彼は私を引き寄せて腕の中にかき抱いた。

「ずっとこうしたかった。……はあ、どうしよう。俺の腕の中に秋月がいるとか信じられない」

ぐっと逞しい腕で引き寄せられて身体が密着する。服を着ていると細身に見えるものの、陽介くんの胸は筋肉質で硬い。胸板の感触とムスクの香りに包まれ、身体芯が甘く疼く。

男性に抱き締められた経験などない私は、混乱しながらもそっと彼の背中に腕を回した。

十年ぶりに再会しただけでなく、彼に好きだと言われて、信じられない思いがまだありつつも喜びが込み上げてくる。自然と目頭が熱くなって涙が零れそうになり、慌てて唇を噛みしめた。

「どうしよう……。嬉しくて……私……」

ずっと秘かに想い続けていた初恋の彼と、十年越しに気持ち为重なり合ったのだ。まるで奇跡のような出来事に魂が揺さぶられる。

「それは俺の方だって。今だって心臓バクバクしてるから」

彼は大きな手で私の髪をすくように優しく撫でる。風が一層強くなってきたせいか、いつの間にかデッキには私たち以外誰もいなくなっていた。

「秋月……」

耳元で名前を呼ばれて鼓動が跳ねる。彼は私の身体に回した腕を緩めて、顔を覗き込む。至近距離でふたりの熱い視線が絡まり合った瞬間、唇を奪われた。

「んっ……」

まるで十年分の想いをぶつけるみたいなキスだった。鼻先が擦れるくらい何度も角度を変えながら唇を重ね合わせる。キスの経験はないけれど、彼の情熱的なキスに理性がとろとろに溶けていく。

「んっ……」

息継ぎの合間に声を漏らすと、彼は唇を離れた。

「今夜は帰したくない」

熱のこもった瞳で私を見つめながら、彼は私の頬に手を当ててそっと親指で撫でる。私に上着を貸したせいか、彼の指先は冷え切っていた。

「私も……まだ陽介くんと一緒にいたい……」

照れながらも本心を伝えようと、陽介くんの喉仏が上下した。

酔いはとくに冷めていたし、場の勢いで言ったのではない。恋愛経験がなくなつて私は大人だし、彼の言葉の意味だつて理解できている。それでも、十年越しの想いが叶った無上の喜びに高揚し、言葉だけではなくそれ以上に深い部分で彼と繋がり合いたかった。

陽介くんはそのまま私の手を引き、車の方へ歩き出した。車に戻るなり彼はどこかへ電話をかけ、今から向かうと告げて車を走らせる。

ドキドキしながら向かった先は、雑誌にも掲載されている超高級ホテルだった。最上階にあるスイートルームに足を踏み入れた私は目を見張る。広々とした室内からは、都心の大パノラマが一望できた。

ラグジュアリー感溢れる寝室に足を踏み入れると、夜景を楽しむ間もなく彼は待ちきれないばかりに早急に私を抱き寄せた。

唇がわずかに触れ合うキスを繰り返しながら、ベッドに押し倒される。ベッドの上で膝立ちになってネクタイを緩める彼を見上げていると、ふいにある不安が込み上げてきた。

彼と一線を越えるのが怖いのではなく、経験がないことで彼に求められてうまく応じられるのが心配だったのだ。

「どうした？」

彼はそれを察しとったように、私の髪を優しく撫でつながら尋ねる。

「あのね、私……こういう経験がないの。だから、陽介くんに迷惑をかけちゃうかも……」

すると、彼はほんの少しだけ驚いたように瞬きしたあと、やわらかく微笑んだ。

「迷惑なわけないだろ。逆に嬉しい」

「でも……」

「大丈夫。全部俺に任せて」

私を安心させるためか、彼は私のおでこにチュッと音を立ててキスを落とした。彼の言葉には不思議な力があり、緊張で強張っていた身体から力が抜けていく。

彼は高価そうな腕時計を外してキングサイズのベッド横に備え付けられた寝台に置き、部屋の電気を消した。月明かりが私たちを優しく照らし出す。

「好きだよ、結乃」

初めて名前を呼ばれた瞬間、彼の特別になれたのだと実感して喜びに胸が打ち震えた。

彼はベッドに放り出されていた私の右手に自分の左手の指を絡ませて、ギュッと優しく握った。

視線が熱く絡み合ったのを合図に、彼は私にキスを落とした。触れるだけの軽いキスのあと、唇を味わうように優しく食^はまれる。

「んっ……」

息継ぎの合間にわずかに開けた唇の隙間から、彼の舌が素早く入り込んできて、舌を吸われて舐め転がされる。脳が痺れてくるような官能的なキスに身体のだるさが震えて、つい甘えた声を漏らしそうになる。

「ふっ……んっ……」

十年間想い続けた初恋の相手である陽介くんと、キスをしているなんて……

意識した途端、溢れんばかりの多幸感で脳が痺れる。

彼はさらに深く舌を差し込んで、私の舌を絡めとる。

長く心地のよいキスのあとに唇が離れた。荒く熱い息を吐く二人の唇の間に、ツーツツといやらしい銀糸が伝う。私は甘いキスの余韻に浸ったまま、とろんとした表情で彼を見上げる。

「……可愛い」

愛おしげに呟き、陽介くんは私をかき抱いて首筋に顔を埋めた。何度かちゅっちゅつと音を立ててキスを落としたあと、ぬるりと生温かい感覚が首筋に走る。首筋を舐め上げられたのだと気付いた瞬間、全身が一気に熱を帯びた。

「あっ……」

首を舐められているのに、なぜか下半身がじれったくなつて膝同士をこすりつけたくなる衝動に駆られる。そのとき、ふとあることを思い出して、今さらと思いながらも私は声を上げた。

「陽介……くんっ、待って」

「どうした？」

「シャワー浴びてきてもいい？」

「……ごめん、途中で止める余裕ない」

口調は普段通りだけど、呼吸には明らかな熱がこもっている。余裕がないというのは本当のようだ。

陽介くんは再び私の首筋から鎖骨に舌を這わせる。肌に触れる柔らかくて温かい舌の感触に、くすぐったいようなじれったいような不思議な気持ちちが湧き上がる。

彼はそのまま大きな手のひらで私の腰の辺りを撫でた。まるで身体のラインを確かめるみたいにじつくりと撫でたあと、黒いワンピースをあつという間に脱がす。

「綺麗だ……」

ピンクベージュの下着姿の私を見下ろして、艶っぽく言う陽介くん。耳から蕩けてしまいそうなほど、彼の声は甘くて心地いい。

偶然ながら、下着は最近購入したもので、ピンク地に白色の花の刺繡^{ししゅう}があしらわれているお気に入りだった。見られるのは恥ずかしいものの、上下セットであつたことに心の底から安堵する。

陽介くんは滾つた瞳で私を見下ろしていた。それは、優しい彼が初めて見せた^{どうも}獐猛な雄の姿で、視線に犯されているみたいな錯覚に陥る。

「結乃は着痩せするタイプだね」

「やつ、見ないで……」

恥ずかしさが込み上げてきて、私はいやいやと首を横に振る。

「それは無理だつて。十年間、ずっとこの日を夢見てきたんだから。見るし、触るし、舐めるよ？」その言葉と同時に彼の手がブラジャーの上から膨らみに触れた。

「結乃の胸、片手じゃ収まらないんだけど」

「あっ……」

形を確かめるように押し揉まれて、すらりと長い指先が乳房に食い込む。巧みにこねられて布越しの感覚にもどかしさを覚え、胸の先端が甘ったるく疼いた。

陽介くんは私の疼きを察したのか、布越しに先端を力り力りと指先で引つ掻く。

「あっ」

途端、身体が小さく跳ねて、自然と甘い声が漏れた。

「ここ好きなんだ？」

顔を真っ赤にしている私の羞恥心をさらに煽るように、陽介くんは尋ねる。けれど、嫌ではない。むしろ、恥ずかしいことを聞かれていると思っただけで、頭の中が沸騰しそうなほど熱くなる。

「分かんない……っ……」